

佛蘭西書巡覧 3

平山 弓月

今日、史観の確立ということをかまびすしくいうようになりましたが、すでにラクロワは、食生活史のみならず、こうして社会風俗の様々な様相を通して、宗教も美術も、それこそごちゃまぜにしてさらけ出してくれています。

辻静雄



フランス料理を文化研究の対象としてとらえ、内外で高く評価されている記念碑的な大冊『フランス料理研究』を著した辻静雄（1933 - 1993）が、その名を挙げるラクロワの著作を今回は緋いて見ましょう。

ポール・ラクロワ **Paul Lacroix**（1806 - 1884）は、P.L.ジャコブ **P.L.Jacob** とか 愛書家ジャコブ **Bibliophile Jacob** の筆名をも用い、19世紀の中葉約40年にわたり多くの著作を世に問いました。パリのアルスナル図書館 **la Bibliothèque de l' Arsenal** で、管理者（司書）の職にありましたが、一方で彼は、歴史家、書誌学者、ジャーナリスト、小説家、劇作家などと呼ばれるように、様々な文筆活動に生涯身を置いていました。一言で表すなら、**L'Érudit**「碩学」であったと言えます。

ラクロワの重要な仕事のひとつが、辻静雄も触れている文化史（風俗史）に関するものでしょう。統一的な書名はありませんが、1869年から10年足らずの期間に刊行された、大部9巻からなる著作を一纏めにして、現在では『ラクロワのフランス文化史』と呼び習わしています。9巻の内訳は、中世及びルネッサンス期については4巻、17世紀（1590 - 1700）・18世紀（1700 - 1789）に関してはそれぞれ2巻ずつ、そしてナポレオン一世の時代（1795 - 1815）に1巻を宛てています。それぞれの巻の体裁はほぼ同じで、縦28.5 cm横19 cm厚さ5.5 cmで、巻によって若干の違いはありますが、ほぼ600頁前後の頁数を数えます。

ラクロワの筆が及ぶ範囲は広大で、それぞれの時代ごとに軍隊生活、宗教、科学、文芸、演劇、芸術、礼儀作法、風俗習慣、服装、流行、料理、社会制度などに及んでいます。さらに彼は、かなりの数の原典資料を駆使しています。当時有数の図書館で本に囲まれて生活していたのですから資料に当たるのは当然だったのでしょう。

しかし、なによりも『ラクロワのフランス文化史』の素晴らしさは、各巻に贅沢に挿入されている挿絵の数多さです。一例を取りましょう。『17世紀社会制度・礼儀作法・服装』**XVII^{ME} Siècle, Institutions, Usages et Costumes** には、16枚の着色石版画と300枚の木版画が頁を飾り、内20枚は別丁図版として添えられています。現代の読者にとって、これらの挿画はなによりのものです。各時代の風俗や服装がどのようなものであったかを調べる仕事を時代考証といいます。こういった場合、言葉だけの記述では到底分かりえないことが多々あります。例えば17世紀を舞台とした物語で、銃士と貴婦人、町人と町娘が登場したとします。文章だけで彼ら彼女たちの服装の違いが分かるでしょうか。また彼ら彼女たちの立ち居振る舞いが思い浮かぶでしょうか。この書の図版が、読者の好奇心に応え、銃士といえどもみんなが同じような服装をしていたのではないことなどを、事細かにまた雄弁に物語ってくれます。また銃士同士の挨拶の仕方も図解してくれています。この巻の圧巻は、1660年8月26日の、ルイ14世と王妃のパリ入城の行列を、従者たちの身分名称をも入れて細かに再現している、見開き2頁分の着色石版画でしょう。

これほど内容の贅沢な書籍は、ラクロワ以降あまり見ることがありません。

ひらやま ゆづき（教授・フランス語・フランス文化論）